２０２３年３月２６日　青戸教会　説教「隅の親石となる」　高橋克樹牧師
聖書　哀歌１章１～１４節、ルカ福音書２０章９～１９節

ルカ福音書２０章９～１９節で、イエスは「ぶどう園と農夫」の譬えを語ります。正確に言えば、ぶどう園の所有者と管理を任された農夫たちとの確執の譬えです。譬えは、ある人物がぶどう園を買い取ったのでしょう。そこで、自分では農作業をしないで長い旅に出て、ぶどう園の管理運営をする農夫を雇って実際の農作業をさせたのでした。

収穫時期になったので、この主人は僕を送って、収穫の対価を受け取ろうとしました。ところが農夫たちはこの僕を袋叩きにして何も持たせないで追い返したのでした。再び、主人は他の僕を贈ったのですが、農夫たちはこの僕も袋叩きにして侮辱して何も持たせないで追い返したのでした。主人はまた別の僕を遣わしたのですが、農夫たちはこの僕には傷を負わせて追い返したのでした。この場合、僕は主人の代理人です。主人の代理人ということは、農夫たちは自分たちの雇い主である主人を袋叩きにしたということです。普通の権利義務関係でいえば、不正行為です。ところが、この主人は懲りずに、今度は自分の息子を遣わすのです。理由は「自分の愛する息子ならば敬ってくれるだろう」と考えたのです。けれども農夫たちは息子をぶどう園から追い出し、殺してしまったのです。

農夫たちの行為はだんだんとエスカレートしていっているのです。この経過を見ると、僕を遣わしているうちは、主人は農夫たちの対応を忍耐していたのでしょうが、愛する息子を殺された時点で、忍耐してきた怒りは頂点に達したことでしょう。そこでイエスは、「さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。戻って来て、この農夫たちを殺して、ぶどう園を他の人たちに与えるに違いない」と、この譬えを締めくくったのでした。ところが、この譬えを聞いていた者たちは、「そんなことがあってはなりません」と答えたのでした。現代の私たちの常識からするならば、農夫たちの行動がふさわしくないと考えるでしょう。この譬えを理解するためには、当時の経済的な状況を勘案しなければなりません。ここに登場するぶどう園の主人は、当時ローマ帝国の属州にぶどう園を所有していた不在地主でしょう。この主人は、おそらくローマに住むお金持ちで、ローマ帝国の権勢を背景にして土地を手に入れた地主であると思われます。ですから、農夫たちは土地を奪われて小作農民に落ちぶれた者たちだった可能性が高いのです。もしかしたら、このぶどう園はもともとはこの農夫たちの持ちものだったかもしれません。そうでなければ、跡取り息子を殺せば、ぶどう園が自分たちのものになると考えたことも納得できますし、。イエスが主人が戻ってきて農夫たちを殺して他の人たちに与えるに違いないと言った言葉に対して「そんなことがあってはなりません」と答えた反応も納得できます。

しかし、この譬えを理解するためには、もう一つ大切な視点が必要です。それは、この譬えが、イエスが十字架への道を歩んでいる中で語られているという点です。この点を勘案するならば、当時の経済構造のことは背後に退きます。

この譬えの主要な登場人物は忍耐強いぶどう園の主人です。聖書では、ぶどう園は神の業が働く場であり、ぶどう園の主人というのは神を暗示しているのです。ぶどう園の主人が神を表すのであるならば、最愛の息子はイエスのことになります。繰り返し遣わされた僕たちは、神が自らの御心を伝えるために遣わした預言者たちということになります。そ

のように考えるならば、農夫たちは神の御心をないがしろにしている者たちということになります。

１３節でぶどう園の主人は「どうしようか」と逡巡しています。３人の僕が次々に追い返され、それでも、主人は不正な暴力への怒りに腹を立てるでもなく、信頼を裏切られたことへの失望に陥ることもなく、また、傷つき痛む僕たちを見る苦痛を感じているにもかかわらず、愛する息子を遣わそうとするのです。ここには主人が農夫たちの心ない行為にもかかわらず、主人との本来あるべき関係に立ち返ろうとする姿に戻ることを忍耐して待っている神の苦悶の姿が浮かび上がってきます。安易な復讐に走ることを必死に回避しながら、人間が改心するのを忍耐して待っている神の姿が見えてきます。ですから、この譬えを聞いた者たちの中で、律法学者や祭司長たちは１９節にあるように、イエスが自分たちにあてつけてこの譬えを話されたのだと受け止めたのです。けれども、律法学者や祭司長たちの受け止め方も間違っているのです。この譬えは、イエスの十字架への道行きを理解しない弟子たちも含めて、イエスと神に対して誤った理解をしている者たちすべてに対して語られたものなのです。

農夫たちは私たち信仰者の神に対する姿勢を如実に現わしているといえます。私たちは苦難や悲しみに直面すると、自分だけが損な役回りをさせられていて、神は助けてくれないと思いがちです。けれども、この譬えが示しているように、神は忍耐して犠牲的な愛を示そうとしておられるのです。ところが、この農夫たちが考えたように、神はこの世で苦労して生きている者たちの苦悩や悲しみを安全地帯にいて、少しも顧みようとされていないと受け止めがちなのです。

人生において、苦難や喪失の出来事が人に悲しみや苦しみを与えるのは、この世界を「獲得」という視点からしかとらえていないからです。獲得のほかにも、私たちを捉えている概念に、進歩や回復、成功といったプラス評価で人生を思い描いた幸せがイコール幸福な人生だと考えがちです。けれども、人生をポジティブな面でしか評価しないならば、苦難や喪失といったネガティブな経験や出来事は不条理なものになってしまいます。「苦痛の棲み家を見ていない者は世界の半分しか見ていない」という言葉があります。苦難や喪失に直面したとき、私たちはそれらの苦しみや悲しみを自分の人生に必要なものだと受け入れることができません。持て余してしまうのです。

けれども、イエスは神の御心を忠実に語り伝える福音宣教の業を行うことで十字架への道行きが避けて通れないことだという運命を、神の御心だと受け止めていくのです。もちろん、私たちはイエスと同じような苦難の道を歩むことはできませんが、自分の人生で不要なものだと判断して捨てた石が、人生を根底から支える隅の親石になっていることに気づくことが神によってもたらされるのです。それは苦難や喪失の出来事に直面しているときは、自分から遠ざけたいもの、人生のマイナスの事柄だと受け止めてしまったものが実は自分が生きていくうえで大切なエネルギー源になっていることに気づくように導かれているのです。それは、神が乗り越えられない試練は与えられないという確信によって、生かされている信仰者だからこそ知ることができる神の御心だからです。